

ハーレム Dynast ダイナスト

新・黄金竜を従えた王国 下巻

小説 竹内けん

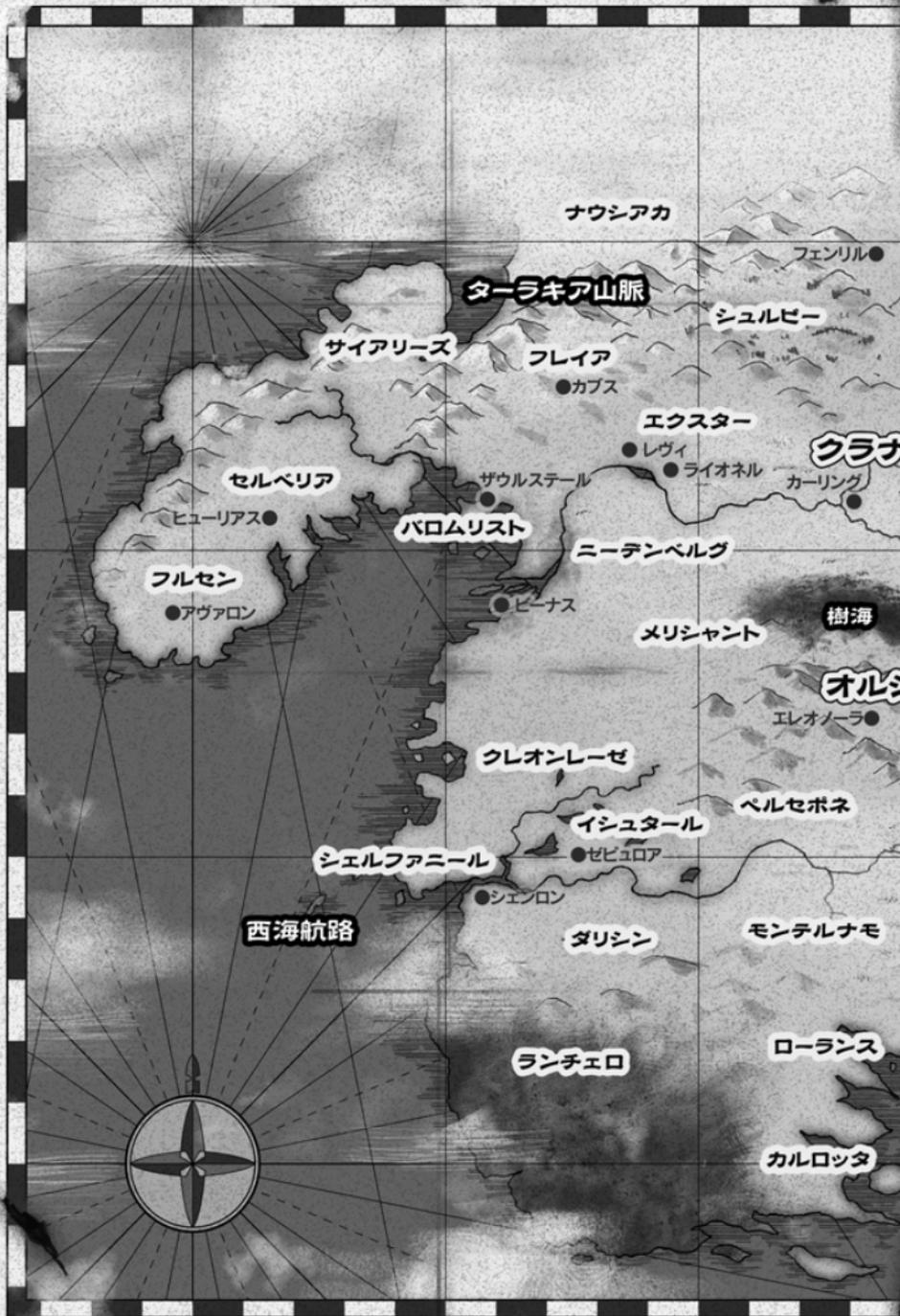
挿絵 せんばた楼



立ち読み版

ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェンリル●

タールキア山脈

シュルビー

サイアリーズ

フレイア

●カブス

エクスター

●レヴィ

●ライオネル

クラナ

カーリング●

セルベリア

ザウルステール●

バロムリスト

ニーテンベルグ

ヒューリアス●

フルセン

●アヴァロン

●ビーナス

メリシャント

樹海

オルシ

エレオノーラ●

クレオンレーゼ

ベルセボネ

イシュタール

●ゼビュロア

シエルファニール

●シェンロン

西海航路

ダリシン

モンテルナモ

ランチェロ

ローランス

カルロッタ



登場人物紹介

Characters



ロレント

ドモス国王。大陸の統一を目指し他国への侵攻を進める野心家。



アンサンドラ

クラナリア王国第二王女。
ドモス国王ロレントに嫁ぎ、
ドモス王妃となる。



バージニア

クラナリア王国第一王女。アンサンドラの姉。魔法の天才。

ルーシー

クラナリア王国大將軍アルバレの娘。アンサンドラの親友。「戦の女神」の異名がある女騎士。





ドミニク

ロレントの副官。冷徹な女。
ロレントに狂的な忠誠心を
捧げている。



ナジャ

ドモス王国の飛龍部隊長。
「ドモスの娘」と呼ばれる、
精悍な女将軍。



ミミ

アンサンドラのお気に入り
の侍女。ルーシーに
憧れている。

第一章 霸王の寵愛を賜る者たち

第二章 魔法狂王女

第三章 高城都市ラムリーズ開城

第四章 王都カーリング攻防

第五章 落花狼藉

第六章 竜は中原へ

012

049

088

130

165

206

上巻のあらすじ

神聖帝国の建国以前、大陸各地では五十を越す国々が互いに覇を競いあい争乱を繰り返していた。のちの世に言う『神々の時代』の歴史ドラマ的一幕である。

大陸のほぼ中央に版図を持ち、沃土に恵まれた大国として名を馳せていたクラナリア王国。その第二王女として生を受けたアンサンドラに縁談が持ち上がる。

相手は、近ごろ北陸の辺境で急速に勃興してきたドモス王国の若き国王ロレント。

ドモス王国とクラナリア王国が国境を接するようになったために行われた政略結婚である。

ロレントの人柄を危険視する親友の女騎士ルースーの反対を「政略結婚は王族の務め」と振りきったアンサンドラはドモス王国に嫁ぐ。





しかし、両国のよき架け橋になろうと夢見る若き姫君の思惑は、夫となった蛮国の王によって無残にも打ち碎かれる。

驚いたことに大陸制覇の野望に取りつかれたロレントは、非道にもアンサンドを妻にすることによって、クラナリア王国の王位継承権を主張し、侵略戦争を仕掛けようとしていたのだ。

その物騒極まりない事態に、恐れおののいたアンサンドラは、彼に覇者としての魅力を感じ、内心では惹かれながらも、侍女のミミを祖国に密使として放つ。

かくして、アンサンドラを旗印にクラナリア併合を目論み一万二千の軍を率いて侵攻するドモス国王ロレントと、クラナリア王国大將軍アルバレ指揮する三万の大軍が、コールラル平原で激突した。

その勝敗の行方は、思いもかけぬものとなる。すなわち、大陸最強と謳われたクラナリア軍が完膚なきまでに壊滅させられたのだ。

敬愛する主君に処女を捧げられた女騎士は、息も絶え絶えであったが、感動に浸っており、ロレントに命じられたら、その場で死んでも後悔がなさそうだ。

「じゃ、次はあたしたちの番ね」

「は〜い、殿下。いつものようにわたしたちを食い散らかしちゃって」

十人を超える健康美女たちが、もうたまらないとばかりに一斉に、ロレントに襲いかかろうとした。

まさにいまから大乱交が始まろうとしたときである。

「待ちなさいっ！」

大声で待ったをかけたのは、湯船から立ち上がったアンサンドラである。

飛龍騎士たちとは根本的に違う。白く柔らかい肢体を晒したアンサンドラは、顔を真っ赤にして叫んだ。

「陛下は、わたくしに背中を流されるのが先です」

いままで湯船の隅で一人大人しくしていたアンサンドラの剣幕に、飛龍騎士たちはびっくりする。

そして、彼女たちの頭目であるナジャの顔を窺う。

「そういうえば、最初はそういう話でしたっけ」

面白そうな顔をするナジャと、必死の形相のアンサンドラの瞳が正対した。ナジャの部下たちは顔を見合わせる。

期せずして、ドモス国王ロレントの女として、寵愛の第一を争う女たちの直接対決となつたのだ。

掴み合いの喧嘩になれば、もちろん、ナジャの圧勝だろうが、女の戦いでそれは禁じ手である。

「わかった。確かにそういう約束だったな」

ナジャの胸から背を起こしたロレントは湯船から立ち上がった。そして、洗い場に出ると、そこに備え付けられていた木の椅子に腰を下ろす。

「さあ。背中を流してもらおうか？」

「あ、はい。ただちに……♪」

顔を輝かせたアンサンドラも慌てて湯船から出ると、ロレントの背中にひざまず跪いた。

しかし、生まれながらのお姫様気質である彼女は、侍女たちに背中を洗われたことはあつても、他人の背中を流した経験などない。

危なっかしい手つきで、備え付けられていた石鹸を手に取り泡立てると、それを夫の広い背に塗りたくる。

その光景に、湯船に残っていた飛龍騎士の一人がアドバイスをした。

「王妃様、何やっているの？ 男の背中を洗うときはおっぱいで洗うものよ」

「え、そうなんですかつ؟! すいません。ありがとうございます」

知らない知識を教えられたアンサンドラは、驚きながらも素直に礼を言い、言われた通

りに泡を自らの胸に乗せた。

そして、ロレントの両肩を抱いて、自らの双乳を、夫の背中に押し付ける。

「こ、これでいいのでしょうか？」

アンサンドラが恐る恐る質問すると、ロレントは重厚に頷く。

「ああ、それでよくおっぱいを擦りつけて、泡立てろ」

「しよ、承知しました」

飛龍騎士のアドバイスが正しかったと知ったアンサンドラは言われるがままに、一生懸命に乳房を擦りつけた。

しかし、そのうちどうしようもない疼きが身を支配しだす。

(あう、どうしよう？ 乳首が擦れて気持ちいい……)

ただ背中を流しているつもりアンサンドラは、自らの性的快感が高まってきたことに恥じ入る。

しかし、心と身体は別物だ。

男に抱かれることを期待している女体である。乳首はピンピンに勃起してしまい。その硬くなった乳首を擦りつけているのだから、否応なく性感が体内に蓄積される。

(乳首が蕩げちゃう。乳首から溶けてなくなってしまうそう)

根が真面目なアンサンドラは、言われた通りにただひたすらに背中に乳房を擦りつけ続けた。いや、男の背中に乳首を擦りつけている作業が気持ちよくてやめられなくなっ

まう。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

熱い吐息を吐きながら、小さく引き締まったお尻を後方に突き出したへっぴり腰の状態
で、内腿を切なく擦り合わせる。

そして、何気ない拍子に、男の肩越しに逸物の様子を覗いて、ギンギンに勃起している
逸物を見つけた。

(もう復活されている。ほ、欲しい……。やだ、わたくしだったらはしたない)

キュンツと子宮が締めまり、下りてきているのが自分でもわかった。

「あはっ♪ 王妃様の内腿凄い。だだ濡れ」

「うふふ、いつも気取った顔していても、一皮抜けばあたしたちと同じ牝犬ってことだね
♪」

湯船に残った女騎士たちが、鈴なりになって好き勝手な感想を言っている。

アンサンドラとしては死にそうなほどに恥ずかしかったが、女としての欲望が止まらな
い。

あまりの興奮状態に頭の中が真っ白になっていると、ロレントから声がかかった。

「洗い終わったか？」

「は、はい……♪」

ようやくロレントがその気になったか、とアンサンドラの返事は華やぐ。しかし、期待

を裏切られた。

「なら、次は腕だ」

「え、あ、はい。承知しました。ここもおっぱいで洗うんですか？」

横に水平に差し出されたロレントの右腕に、自らの乳房をどうやって押し付けようと思案していると、思わぬ指示が来た。

「いや、陰毛で洗え」

「え、陰毛？」

戸惑うアンサンドラに、たくましい腕を差し出す男は冷厳と命じた。

「ああ、陰毛に石鹸をつけて、腕に跨がれ」

目を瞬かせたアンサンドラだが、素直に石鹸で自らの黄金の陰毛を泡立てた。そして、恐る恐る男の右腕に跨がる。

「こ、こうですか？ あう♪」

「ああ、それで腕の先から肩まで往復しろ」

跨がったロレントの腕の肩のほうを向いたアンサンドラは言われた通りに、ズルズルと下から上へと陰毛を擦りつけるようにして洗う。

「はううう……♪」

陰毛で洗うと言っても、アンサンドラの陰毛は決して濃いほうではない。むしろ、まだ生えそろっていない、と言っているいいレベルである。

これで洗うというのは不可能だ。むしろ、陰唇を男の肌に擦りつけているようなものがある。

もうすでに見物人の女騎士たちが指摘していたように、失禁したかのようにただ濡れになっっている粘膜を、愛しい男に擦りつけたらどうなるか、その答えは自明のことだ。

(おしっこ、漏らしちゃいそうなくらい気持ちいい♪)

ピクピクと電流にも似た快感が背筋を駆け上がるのを感じたアンサンンドラは、勃起し、半分顔を出した淫核を、夢中になって擦りつける。

「アンサンンドラ、おまえ濡れすぎだな。そんなんじゃ、いつまでたっても終わらないぞ」
「す、すいません。あううう……」

恥じ入りながらもアンサンンドラの腰は止まらない。いや、むしろ、自分の愛液を男に塗りつけることに密かな喜びがあった。

それは犬のマーキングに似た心理なのかもしれない。

愛液を塗りたいことによって、これは自分の男なのだ、という安心感を持つ。

「ああ、もう、あんたら見せつけすぎっ！」

苛立った声を上げたナジャが、不意に湯船から飛び出してきた。

「陛下、左腕はあたしが洗いますよ。いいですね」

「ああ、好きにしる」

許可をもらったナジャは、豊かな赤毛を振り乱してロレントの左腕に跨がると、自らの

赤い陰毛を擦りつけた。

「うわ、ついに直接対決っ!!」

湯船に残った女たちは歓声を上げて盛り上がる。

政略結婚でドモス王国の王妃になった女と、それがなければドモス王国の王妃になったであろう女。

その深き因縁を持つ美少女二人は、同じ男の左右の腕を跨がり、腰を前後させる。

「はあ……はあ……、はあ……んっ♪」

アンサンドラとナジャは、互いの淫ら顔を見つめあう。

(は、恥ずかしい。何魅入っているのかしらわたくしっ……)

同性の喘ぎ顔に見とれたアンサンドラが恥じて顔を背けようとした瞬間である。

ナジャは逆に顔を近づけて、年下の王妃の唇を奪った。

「んっ!!」

仰天したアンサンドラは目を見開く。

同性に唇を奪われたのはルーシーに次いで二人目である。

我に返って慌てて振り払おうとしたが、下半身が萎えていて力が入らない。

「むちゅ、ちゅ、じゅるる……」

容赦なく口内を陵辱されて、舌を絡め取られる。さらにナジャの右手が伸びて、アンサンドラの乳房を捉えた。



戸惑っているアンサンドラの手をもう一方の手で引つ張ったナジャは、自らの乳房を握らせる。

(凄い、弾力っ!? 気持ちいい)

相手の意図を察したアンサンドラは、両手でナジャの双乳を掴み揉む。ナジャもまたアンサンドラの双乳を揉む。

「ふう、うむむ、あん……」

アンサンドラとナジャの二人は、ロレントの肩に跨がり、下腹部で頭を挟むようにしながら、上体ではそれぞれの乳房を揉み、濃厚な接吻を楽しむ。

(わ、わたくし、何をやっているのかしら。同性同士でこんなことを、それもロレント様に跨がったまま、ああ、でも気持ちいい♪)

自分が気持ちよくしてやればやるほど、相手も気持ちよくしてもらえる気がして、アンサンドラはビンビンに尖った乳首を抜きたてる。

「うむ、うむむ……♪」

男の両肩で女たちの股間はグイグイと擦りつけられる。ロレントの両耳にはそれぞれ膣穴から溢れる蜜の水音が聞こえていたことだろう。

やがてナジャから接吻を離れた。

「ぶはっ♪ あんたねんねみたいな顔して、意外に淫乱ね」

「だって、陛下が淫乱な女性が好きだって言うんですもの……」

「うわ、マジなんだあんたも」

恥じ入るアンサンドラの顔を見つめる砂色の瞳がすつと厳しくなる。しかし、次の瞬間には破顔していた。

「まあ、女の戦いはそう簡単に決着がつくものではないか？ それはそれとして、そろそろ陛下のおちんちんを洗おうよお♪」

「えっ……」

「いいですよね。陛下」

甘えたナジャの声に、ロレントは重厚に頷く。

「ああ、頼む」

アンサンドラとナジャは、腰が砕けるようにして、開かれたロレントの股の間に屈み込んだ。

「ああ、陛下のおちんちん……」

愛しそうに頬ずりをするアンサンドラの黄金の頭髪を撫でてやりながら、ロレントが質問する。

「懐かしいか？」

「はい。少し会えなかっただけで凄く寂しかったです」

恥ずかしそうに頬を染めながらアンサンドラは認めた。

連日連夜、休む間もなくやられまくっていたときは気づかなくとも、間を開けることに

よって、自分がすっかり逸物の奴隷になり下がっていることを自覚する。

「あたしだって寂しかったわよ」

二人のいい雰囲気を感じたナジャは、不満を表明する。

「ああ、俺も寂しかったぞ」

ロレントは左手でナジャの赤毛を撫でてやる。

「それじゃ、ご奉仕させて頂きます」

アンサンドラが口唇を開き、おずおずと舌を差し出そうとするのを、ナジャが止めた。

「あんた何しようとしているのよ。洗うのよ。あ・ら・う」

「洗う。そ、そうでした」

愛しい逸物を鼻先にして、唾えしゃぶることしか頭になくなってしまっていたアンサン

ドラは、自分の浅ましさに顔を真っ赤にする。

「で、では、おちんちんを洗うのはどうしたらいいのでしょうか？」

「おっぱいで洗うに決まっているじゃない」

「えっ、おっぱいですか？」

今一つピンと来ていないアンサンドラの様子に、ナジャは愉快げに笑った。

「ん？ あんたまだやったことないの？ おっぱいでこのおちんちん挟むのよ。パイズリ

といって、男が大好きな奉仕の一つらしいよ。もちろん、陛下も大好きなだけだね」

「おっぱいで挟まれるの、好きなんですか？」

真剣な顔で睨まれたロレントは、頬を掻きながら答えた。

「そりや、まあ、嫌いな男はいないだろ」

「もう、なんでそんな大事なことを教えてくれないんですかっ!!」

頬を膨らませるアンサンドラの姿に、ロレントは含み笑いをする。

「くつくつく、エッチな技を仕込んでもらえなかったから拗ねるとは……アンサンドラも成長したもんだ」

「笑い事ではありません。わたくしはロレント様の妻なのです。妻である以上、夫を喜ばせるすべは他の女のそれよりも知っておきたいです」

「うわ、それあたしへの宣戦布告だと受け取ったけどいいの?」

ナジャが頬を引きつらせながら質問する。

「はい。わたくしは正室で、ナジャさんは側室です」

「あんたも言うようになったわねえ」

バリバリバリと目に見えない火花が散った。見かねたロレントが仲裁する。

「つたく、パイズリしたいなら二人仲よくしろ、あまりそういう生臭い話をされると萎えちまうぞ」

「それは困ります。わたくしの胸で、いや、おっぱいで気持ちよくなってくださいませ」

二人は慌てて、自らの乳房に泡をつけて、競うようにして逸物を挟んだ。

ヌラリ、ヌラリ……。

褐色の滑らかな乳肌と、乳白色のつややかな乳肌によって漆黒の逸物が弄ばれる。

ズボツ、ズボツ、ズボツ……。

四つの乳房に包まれて、亀頭部が顔を出したり、沈めたりする。

乳房を持つて上下運動するというのは、結構な労働なのだろう。アンサンドラもナジャも全身から玉のような汗を噴き出し、滴となって流れた。

石鹸の泡がよく立ち、先ほどマディアという新米飛龍騎士の破瓜の血が付着していたのか、泡は一時、赤くなった。

「ち、乳首が擦れて、気持ちいいです。はあ、はあ……」

「あたしも、気持ちいい……」

すでに二つの女体は、タワシ洗いでかなり性的に高まってしまっているのだろう。

切なげな声を上げながら、お尻をクネクネと切なげに振るっている。

欲情しきっている牝猫たちは、互いの乳首を擦り合わせたり、亀頭の裏側を擦ってみたりしていたが、期せずして二人は舌を伸ばし、亀頭部に舌を合わせた。

「ふ、ふん、ふう……」

「あむ、むじゅ、じゅるる……」

ピチャリピチャリピチャリ……。

青い瞳と砂色の瞳が合わさり、不意に口を開いた。

「なかなかやるわね」



豪華な墜壁に酔いしれたロレントは、ドスドスと突き上げた。

「あつ、あつ、あつ、凄い、あつ、大きい、あつ、ヒィー、あつ……」

ロレントが初めての男だったアンサンドラと違い、ルーシーは曲がりなりにも、他の男というものを知っている。

だから、何も知らずにロレントを迎え入れたアンサンドラは、男とはこういうものか、と思い込んでしまっていたが、なまじ経験のあるルーシーにとつて、その巨根ぶりと、力感に驚愕すべきものだった。

「どお、陛下のおちんちんつて凄い気持ちいいでしょ♪」

快感に悶え狂うルーシーの右耳の後ろから我がことのように自慢したアンサンドラが、背後から両の乳房を捉えて揉み始めた。

「ああ、はい。お腹がいつぱいで、気持ちいいです、あああ……っ!!」

女としては決して軽いとは言えないルーシーの身体を抱えて、リズムカルに突き上げられる肉棒。

グチュグチュと体内をかき混ぜられ、子宮口まで突き上げられる。

そのすつかり忘れていた牡に征服される歓びを、無理やり思い出させられたルーシーは、逃げるでもなく恥じらうでもなく、夢中になって男の首に両手でしがみつき、両足を絡めてしまった。

「あんっ、うあん、あ、うあつあー……」

突き上げられるたびに、量感のある乳房が弾み、噴き出した汗が霧のように舞った。

これが男嫌いと噂された女傑の姿だとはだれも思わないであろう。

完全に女の顔になっている親友の顔を愛しげに見ながら乳房に悪戯していたアンサンドラは、夫に質問する。

「いかがですか？ 陛下、ルーシーの抱き心地は？」

「悪くはないな。こういう女を征服支配するというのも、また勝ち戦の楽しみだからな」
「まあ、悪趣味ですわ」

クスクスと嗤ったアンサンドラだが、特に咎めだてはしなかった。

「ああ、もう、もう、イク、いきます。いく、いく、いく」

仇と狙った男の野太い逸物で突き回されたルーシーは限界を迎えた。その乳房を弄びながら、耳元でアンサンドラが優しく煽る。

「イっていいわよ。思いつきイってしまいなさい。わたくしのルーシー♪」

「はうっ……!!!」

ビク、ビクビクビクビク……!!!

愛する主君の囁きがダメ押しとなったのだろう。男にしがみついた女傑の肢体が激しく痙攣した。ザラザラの贅肉もギュッギュッと肉棒を締め上げる。

「くっ」

それはロレントを唸らせるほどの締めつけであった。そして、ガクンとルーシーの首が

後方に倒れた。

絶頂したのだ。女としてももっとも満足できる体中がカーッと熱くなる絶頂であった。

しかし、ロレントの責めは終わらず続く。

「っ!? ひっ、ひい——ッ、そんな連続だなんてっ!?」

「あら、ルーシーったら、何驚いているの? これからが本番ですわよ。六発ぐらいは連続でイってもらうわよ」

ギンギンに硬く野太い逸物での掘削が永遠に続く。

ガリガリガリと内襲をかき混ぜられて、子宮口をドスドスと突き上げられて、ルーシーはビクビクとたくましい肢体を痙攣させた。

「助けて、壊れる、壊れちゃう。あん、あん、あん、あん、あん……」

まるで壊れた人形のように首をカクカクと後ろに反らし、ひと突きされるごとに気をやっっているようだった。

とうに命を捨てる覚悟のできていたルーシーであったが、頭が真っ白になってしまい、慈悲を乞うた。

しかし、彼女の愛しい主君は残酷だった。

「ヒイツ!」

ルーシーの肛門にそっと指が添えられて、ねじ込まれたのだ。

「ひ、姫様……なにをっ!」

「あら、こちらは経験がなかったの。ルーシーの初めてになれたなんて嬉しいわ」
本当に嬉しそうな声を出しながら、アンサンドラは二本の指をルーシーの肛門に押し入れてザクザクと掘削した。

「ああああああ……!？」

「どお、ルーシー。陛下のおちんちん入れられながら、肛門に指入れられると凄いでしょ。うふふ、ルーシーの肛門越しに陛下のおちんちんのゴリゴリした感じが伝わってくるわ♪」
前の穴にはロレントの極太逸物。後ろの穴にはアンサンドラの織手を入れて、ルーシーは、わけのわからない嬌声を上げてのたうった。

「ああ、許して、ください。もう、これ以上は……あつ、あは、あはは、あははは」
涙を流し、舌尖を出し、涎を垂らしながら嬌声を上げるルーシーの目は、完全にイってしまっている。

普段のルーシーを知る人が見たら、およそ信じられないことだった。クラナリアの国民から『戦の女神』と敬愛され、最後の希望とされた女が、もはやその片鱗さえ感じさせぬアへ顔を晒しているのだ。それでいて腔洞だけは男根を貪欲に吸い込む。

「くっ、そろそろこの女は限界だぞ」

いかに並の女とは比べ物にならない体力のあるルーシーとはいえ、女は女である。男の、その中でも化け物じみた体力を持つ男に敵うはずがない。

アンサンドラもそれを認めた。

「そうですわね。最後に陛下。ルーシーにお情けを賜れますか？」

「注文が多いな」

ロレントのぼやきに、アンサンドラは申し訳なさそうに応じる。

「お情けを注いで頂けるか頂けないかは、女にとって大きな違いです。それがないと画竜点睛を欠くということになりますから。ぜひ♪」

「わかった。ここまで来たら、おまえの言う通りにしてやるぜ」

いかにもアンサンドラに恩を売った風ではあるが、よく締まるザラザラの腔洞の中で暴れ回っていたロレントのほうも追い詰められていたのだろう。

すぐに限界を訴えた。

「それじゃ、いくぞ。うおおおおーっ!!!」

雄叫びを上げながら爆発したマグマが、女体の中を駆け上がった。

ドブン、ドブン、ドブン。

「ヒィああああ……」

かすかに息を吸い込んだような奇声を発して、ルーシーの目がぐるりと裏返った。

「ああ、凄い。いっばい、いっばい、入ってくるう」

喉の奥からかすれた悲鳴が上がった。

久しく忘れていた男の脈打ちに、ルーシーの身体はさらなる高みへと登ったらしい。灼熱の液体を注ぎ終えても、恍惚としているルーシーの体内に長く留まったロレントは、



又チャリと音を立てながら逸物を引き抜いた。

「ああ……」

肉体を完全に弛緩させてしまったルーシーは、アンサンドラの胸に抱かれた。

だらしなく開かれた両足の狭間、開ききった隘口からは、白濁の吐液がドロドロと逆流している。

※

ことを終えたロレントは、再び王座に座り、汚された逸物は、ドミニクとナジャが丁寧に舐めて清めた。

「どお、ルーシー気持ちよかったですよ。これでわたくしたちはさらに親しい関係になれたわ」

「はい、姫様……」

ルーシーが落ち着いたところを見澄まして、アンサンドラは立ち上がった。

「ルーシー、それからお姉様に聞いて頂きたいことがあります」

胸に両手を当てたアンサンドラは、無表情に椅子に座っているバージニアと、完全に腰が抜けているルーシーに訴えた。

「わたくしはクラナリアにとって、薄汚い裏切り者。お父様とお母様。そして、多くの国民を死に追いやった許されざる女です。そのことは重々、承知しております。でも、それでもやりたいことがあります。ドモス国王ロレントの夢は世界の征服です。それは血に濡

れた道。でも、それが終われば再生のときがくる。陛下は世界征服の野望はあっても、その後の展望はないお方です。それをわたくしが埋めたい。いまは無敵に思える陛下だって必ず老いる。世代交代のときは来ます。その後継者はわたくしが必ず産みます。そして、平和への礎となりたい」

「……まったく、言いたい放題に言ってくれるな」

王座に座っているロレントは思わずぼやいた。しかし、事実なだけに反論もできない。「いつも思うんだけど、あの女って、何気にあたしに喧嘩売るわよね」

ロレントの後継者を産む気満々のナジャも、好戦的な猫のように目を輝かせる。

「確かに油断ならない女ですわね」

ドミニクもまた、アンサンドラを見直したような顔になる。

「わたくし一人の力では無理です。クラナリアの力が必要です。ルーシーとお姉様に支えて頂きたいのです」

「……」

バージニアとルーシーがどう出るか、ロレントとその側近の女たちは興味深そうに一連のやり取りを眺める。

やがて、惚けていたバージニアの瞳に光が戻った。そして、ゆっくりと椅子から立ち上がる。

「これがあなたの戦争？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)




全国書店で
**好評
発売中**

**真夏のキャンプ場で勃発する
天使vs魔族vs人間の
三つどもえバトル!**

思春期なアダムち
アウトサイド・ドリーム

【小説・さかき傘 / 挿絵・天海雪ひ]




全国書店で
**好評
発売中**

**俺のフラグは
よりどりみりデレ**

【小説・栗栖ティナ / 挿絵・火曜】

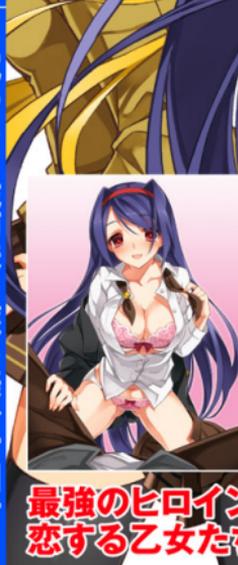



全国書店で
**好評
発売中**

**平凡な少年が女体化!
鬼に狙われた
従姉妹を護れ!!**

**目覚めると従姉妹を護る美少女剣士に
なっていた**

【小説・狩野景 / 挿絵・天鬼とくり】



**最強のヒロインの座を狙い、
恋する乙女たちがH&バトル!**

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙股学園戦姫 / ノブナガ! ①~④
- ヒルグリムメイデン ①~③
- 無敵の姫騎士がDMに目覚めたようす

- 思春期なアダム ①~④
- 仮面娘らい萌 [カースイーター] ①~②
- 不死の吸血鬼がVSのご主人様を募集しているようす

- 借金お嬢クリス ①~③
- 魔海少女ルルイ・エルル ①~②
- オトミコ 僕は男の巫女娘

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic-alkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!